

新会長あいさつ

国際競争力向上のための 品質立国—日本の再生 (Q-Japan)



(株)リコー 代表取締役
桜井 正光

このたび会長(第35年度)に就任するにあたり、社会に貢献する学会、会員のためになる魅力的な学会を目指し、学会機能のさらなる強化に尽力したいと考えている。言い換えれば、国際競争力向上のための“品質立国—日本の再生”に貢献できる学会づくりであろう。

日本の国際競争力は、90年の半ば以降急速に低下してまだ20位以下に低迷している。中期戦略展開を考えると、質の高いサービス—経営改革のための品質マネジメントや革新的な解決プログラムとしての科学的アプローチなど—の継続的な開発・提供が学会には強く求められていると認識している。

国際競争力向上のための“品質立国—日本の再生”(副題としてQ-Japan)を目指し、「Qの確保」「Qの展開」「Qの創造」の3つの切り口で経営品質の強化に貢献する活動を進めたいと考える。

「Qの確保」とは、まさに当たり前品質の確保であるが、現実的には昨今あってはならない品質トラブルや事故の発生、その対応のまずさから社会的信用さえも失うようなケースが発生している。解決に当たっては、決めたとおりに実施できていない品質管理の基礎的な問題から、技術の進歩による複雑な問題、加えて学理的に究明し切れていない技術の採用などによる問題などに分類し、木目細かな対応が必要である。

社会が求める安全・安心を確保するため、技術の革新や複雑化に対応したさらなるTQMの深堀りと革新が求められている。複雑化する問題解決に当たっては、学理的なアプローチやツールの開発、特にITやデジタルエンジニアリングといった新しい技術を補完する品質技術やアプローチの開発が必要であろう。また、それらの迅速な活用と確実な成果出しに当たっては、

従来以上の情報公開および情報共有をベースとした産学連携活動が必要である。

「Qの展開」とは、長年にわたって製造業で培ったTQM活動、すなわち「Qの確保」を、もっと広くサービス業・運輸業・卸売・小売業など、また教育、行政へまで展開していく活動である。

最近、医療分野での当学会が果たしている役割が拡大し、成果を上げていることは喜ばしいことであるが、さらに安心・安全の確保された社会を実現するためには強化対象領域を広げていかなければならない。

「Qの創造」とは、日本企業の国際競争力を強化するために顧客の潜在ニーズを掘り起こす活動である。そのためには、新たな品質の概念構築と価値創造のための品質マネジメントの研究開発推進が必要である。今回、新たに研究会を立ち上げ、価値創造開発のための学際的なプロセス立案と産業界での試行により、進化する社会に的確に必要な情報発信していく役を担っていききたい。

これら3つの切り口での活動は単年度で達成できるものではなく、中長期計画に基づく単年度計画の積み上げが必要である。本年度からは中長期計画のローリングを強化しつつ、社会に期待される学会の礎となる年としたい。

また、学会パブリシティーの一層の向上、国際化対応の強化、会員へのサービスの拡大なども視野に入れた中期計画を立て、「品質立国」をリードする魅力ある学会にしたいと考えている。

最後に、会員各位の学会活動への積極的な関与が学会、所属事業体および会員各位の発展に繋がると認識しており、積極的な参加をお願いしたい。

前会長あいさつ

会長退任にあたって



東京大学 教授
飯塚 悦功

昨年11月の年次総会において2年間の会長職から解放され、ほっとしています。この間、理事をはじめ評議員、会員の方々には大変お世話になりました。それにもかかわらず、学会のためにとりたてて何もできず申し訳ありません。月並みではありますが、皆様に深くお詫びし、また厚く御礼申し上げます。

やはりこの役は私には大きすぎました。会長を務めるのに楽な時期はないとわかってはいましたが、それにしても厳しいときに仰せつかったものです。会長就任前には助走期間がありました。11年の無沙汰を経て、2001年10月に副会長としてJSQC理事会へ復帰したのです。副会長を務めつつ構造改革が必要な品質管理をどうしたものかと悩み続けましたが、あっという間に会長見習いの2年間は過ぎてしまいました。

そして2003年11月、名古屋工業大学での年次総会を迎え、困りきったのが新会長講演です。見習いとして準備期間は十分あったはずだし、思うところを正直に話せばよいのだから何も難しいことはないはずなのですが、それでも困りました。

その結果が「Q-Japan構想」です。命名がやや安易なのと、中身の具体性のなさゆえに、それほど自信を持ってなかったし、何よりもそれまでの私の言動に対する周囲の反応から、理解していただけるとは思えず、どこまで何を言おうかと迷ったのです。

新会長講演では、今後の品質管理に対する明確なメッセージを表明したかったし、学会の取り組みについての決意も述べたいと思いました。軽薄な名称だと非難を受けるかもしれませんが、私にとって「Q-Japan」は、他に候補のないプロジェクト名でした。内容については、当初より真正面から行こうと決めていました。品質管理の地位低下は社会・経済の変化に

応じて、品質管理自身が改革をしてこなかったことによるものと分析していたからです。

それで、第一は時代が求める「精神構造」の確立、第二は「競争力」という視点での品質の考察、第三は「社会技術」のレベル向上としました。これらの意味については、「品質」誌に寄稿させていただきましたし、他にも講演、記事などで紹介しておりますので、ご参照いただければ幸いです。

この理念を掲げて2年、会長として日本品質管理学会をリードしてきたはずなのですが、いかんせん私は非力でした。世間は動きません。Q-Japan構想で最も訴えたかったこと、それは「自律」ですが、ほとんどわかっていただけませんでした。また、品質の意義を競争力の視点で考える、すなわち競争優位のための品質管理について考察することについても、理解は浸透しませんでした。むしろ、海外での反応が鋭いことに複雑な心境でした。

このような中、私にとってうれしかったのは、ある理事会で副会長だった現会長の桜井氏に「Q-Japan、なかなかのものですな」といわれたことです。売り上げ2兆円目前の大企業の社長を長く務めてきた方から「競争力のための品質というとらえ方がよい」といわれたことで元気が出てきたことを思い出します。その桜井会長がQ-Japanを継承してくださるとのこと、私にとっては恐ろしくもあり嬉しくもあります。

将来、日本品質管理学会の会長を務めたことを誇れるようになりたいものです。そのため個人としてこの2年を総括し、それを踏まえて一会員として品質管理界に尽くしていきたいと決意を新たにしています。